

川柳マガジン4月句会 自由吟

コメント 松橋帆波

黄砂舞う空に白鳥北帰行  
時事としての黄砂の「色」と白鳥の対比と捉えると面白いが、時事と捉えるかどうかは読み手による。

ラストラン夜汽車の汽笛闇を抜け  
「夜汽車」「闇を抜け」と意味として重なる表現が気になる。

もう逢えぬ人と酌み合う時を止め  
下五が上五の思いを強調している。「人」を省略できるかどうか検証してみたい。

うちの子に限ってそんなことをする  
口語として一気に読ませたいための一字開けは一定の効果を挙げているが、「する」が二音字だけに、もう少し落差が欲しいところ。

正札と勿体付けて売っている  
商店の矜持として正札で売る、という状況との比較をすると面白い作品だが、中七で表されている穿ちを、どの程度読み取ってもらえるかだろう。

なりたくない早くなりたいたい六十五年  
年金受給年齢の六十五歳とみると、老いることへの思いとしての対語がおもしろいが、時事的に捉えられると、また違って印象をもたれるのでは。

宇宙から見れば地球は未だ青いかぐやの美しい映像をみるとなるほどと思える作品。ただ「地球は青い」という思いにどれだけのことを乗せられるか、読み手それぞれの意見を聞いてみたい。

嫁任せ巢鴨へ今日も紅を引く  
下五はありがちな表現だが、本作品では上五の利きがそれを補っている。

飽食のグルメに馴れたテレビジョン  
「馴れた」という表現と「テレビジョン」という音字数を検討したい。

「飽食のテレビ バブルをまだ続け」

宇宙基地いずれ地球を過疎にする  
空想の世界というより、日本の実験施設の「希望」という名へのカリカチュアと捉えると面白い。

晒し者にされた乾杯のポーズ  
状況の切り取りとして面白い。表現に関しては語順など検証してみたい

大陸の錆か黄砂が飛んでくる  
「大陸の錆」という表現は手柄。もう少し突っ込むと面白くなるが厭味にもなる。

挨拶代り中身の額がものを言う  
現金というよりもお使い物の価格と捉えたほうが面白い。

カーナビに詫びて選んだマイウェイ  
反骨を感じる作品。下五を「僕の道」などカタカナではない表記と比較検証してみたい。

春を待ってる恋も桜も  
「春」「恋」「桜」と言葉の持つイメージ・色を揃えたところが手柄。十四字詩として完成している。

春の夜のピノキオの鼻誰も持ち  
助詞を省いた形の下五について検証してみたい。

少しずれ大きくずれて今の幸  
上五、中七の振幅を下五で収斂させる手法は、古くからあるが、平易な表現が句の姿を落ち着かせており、月並み感を脱している。

利用価値あって大事にされている  
高齢社会を考えると句意は通じるが、より具

体的な事柄があればと思う。

極上の笑顔遺影にしておくれ  
この下五の形は手柄。主人公がこの言葉を発した状況が読み手によってさまざまに広がっていく。

春たちがパッチワークに色をつけ  
上五・中七・下五それぞれの言葉に落差がないため平坦な印象を受ける。対比が強調につながることの検証をしてみたい。

**DNA**ひとつ削って咲き誇る  
そういう事実があったかどうか定かではないが、遺伝子操作のことだろう。面白い着想だが、共有性があるかどうか。

サクサク打って飲んでる大ジョッキ  
電報というよりはケータイというイメージ。  
大学合格と飲酒のギャップを読み手がどう広げるか。

お荷物にされてる後期高齢者  
もう少しひねりが欲しいところ。共有制は高いが、時事ならではの穿ちが欲しい。

散ることのできる桜が妬ましい  
「の」か「が」か、というところ。「散る」の意味を二つに掛けているのだが、どうか。

消しゴムの屑にまぎれている秘密  
消しゴムであるか鉛筆でかかれたものであろう。どこか淡い思いを連想させる秀作。

二番目に好きと書かれたハガキ来る  
上五がキーワードとなって句の世界を広げている。「何故二番目か」を作者から聞くのか、読み手がそれぞれに創造するのか、川柳の楽しみ方としての個々の意見を検証してみたい。

年金の死なない程の有り難さ  
中七をアイロニーと捉えるか、実感と捉えるかで句境が変わってくる。作者、読み手それぞれの捉え方を聞いてみたい。

ゴミ屋敷住んでる人は何者だ  
状況をテーマとした課題吟の習作のような印象を受ける。直接的感情の次の段階を見てみたい。

真夜中の爆音僕はここにいる  
この蘄の表現は面白い。自身の存在を無意識に起こる生理現象で浮き上がらせたのは手柄。